太平洋戦争における戦争指導
－アメリカ側から見た研究史－

進藤　裕之

はじめに

真珠湾攻撃の 70 周年を迎えた今日においても、太平洋戦争を対象とした研究が日米両国で出版されている。そこで、開戦後 70 年という節目を機に、アメリカで出版されてきた太平洋戦争の研究書の代表例を、以下において紹介する。太平洋戦争の一方の当事国であったアメリカでは軍事史研究が盛んに行われており、テーマの設定、分析方法、視点等、今後の日本における太平洋戦争の研究に資することを期待し、日本ではあまり知られていない作品も取り上げた。また、日本では戦争指導に関する研究への関心が特に高いことから、主にアメリカの対日戦争指導を取り上げた研究を中心としたが、作戦・戦闘その他に重点を置いた研究も一部対象とした。また、比較的近年に出版されたものを中心にするよう試みたが、1970 年代から 80 年代にかけて出版されたものも適宜取り上げた。

1　アメリカにおける太平洋戦争の研究の特徴と関心事

アメリカの対日戦争指導の研究を紹介する前に、まず「戦争指導」という用語の英訳について考えなければならない。そもそも、「戦争指導」はドイツの *Kriegsführung* の和訳であり、英語では完全に一致する用語はない。最も近い用語として、grand strategy、direction of the war、war leadership 等をあげることができる。「戦争指導」が名詞として使われる場合、最も近い英語は grand strategy である[1]。ところが、grand strategy（大戦略）には military strategy（軍事戦略）の他に、national strategy（国家戦略）も含まれる。そして、national strategy は「戦時の国家目標を達成するために国力の全ての要素―政治的、経済的、軍事的、技術的および精神的なもの―を準備し適用する」ものであり、「その国の政治指導者が、軍事、経済、科学および技術の顧問と提携しながら担当すべき分野」とされている[2]。一方の military strategy は当然ながら national strategy の最

[1] 筆者とW・マレー(Williamson Murray)との談話（2009 年 9 月）における Murray 氏のコメント。
[2] Jeffrey G. Barlow, "American and Allied Strategy and Campaigns in the Pacific War, 1941-1945," in Loyd E. Lee, ed., *World War II in Asia and the Pacific and the War's Aftermath, with General Themes: A Handbook of Literature and Research* (Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1998), p. 72.

も重要な要素であり、軍部の最高指導者（陸海軍の将官）が担当すべきものとされてきた[3]。

そのため、日本で「戦争指導」の研究と言われるものに最も近い研究は、アメリカでは「大戦略」に関する研究であるが、「大戦略」が以上のように広く捉えられているため、その研究の対象も単なる軍事戦略より広いものである。従って、アメリカにおける「太平洋戦争の戦争指導の研究」を検討する場合、太平洋戦争全般の研究を対象にしなければならない。

アメリカにおける太平洋戦争の研究書のテーマは、「戦争指導」に限定されないで、幅広いテーマが設定されるのがほとんどであるが、その背景にある歴史的な経緯は次の通りである。第二次世界大戦後、陸軍の公刊戦史が編纂されるに当たって、当時の陸軍参謀総長であったアイゼンハワー大将が第二次世界大戦におけるアメリカ陸軍の活動の完全な記録を残す旨の指示を与えたが、そのことにより、陸軍の公刊戦史は戦争指導史と作戦・戦闘史はもちろん、兵站、WAC（Women's Army Corps）の活動、陸軍における黒人兵士の体験等、言わば「その他の分野」の様々な活動形態、組織および争点を対象とすることになった。裏返せば、この編纂方針により、従来の戦争指導史と作戦・戦闘史に含まれない項目も、アメリカでは「軍事史」の一分野として認知されるようになった。陸軍の公刊戦史の編纂に約 90 名の執筆者が最終的に関与したが、その後、これらは全国各地の大学等に職を得て、それぞれの専門の研究を続けたことにより、「その他の分野」の軍事史研究もそれぞれ発展した[4]。

このような経緯を経て、特に第二次世界大戦後、アメリカでは学界における軍事史の研究は盛況し、1970 年代前半には、軍事史に関わる講義を設けた大学は 110 校にも上った[5]。その結果、アメリカではいわゆる New Military History （「新しい軍事史」）という概念が育った。従来の軍事史の中身が戦争指導史と作戦指導史であれば、この「新しい軍事史」は戦争という現象と社会、経済、政治および文化との相互作用をより重視し、外交史や社会史等の視点や分析方法をも取り入れたものであった[6]。

このように、アメリカでは「戦争指導」を広い意味で捉える傾向があるとともに、幅広いテーマを対象とした軍事史研究を行う伝統がある。従って、太平洋戦争に関連するアメリカにおける最近の研究の動向を検討するに当たって、戦争指導史を中心的なテーマとしていない研究書も対象に入れざるを得ない。

アメリカにおける太平洋戦争の研究は様々なテーマを取り上げ、視点も多様であるが、問題意識はある程度共有されている。例えば、アメリカの対日戦争指導については、対独戦と対日戦に向けた国力・戦力の比重の当否の問題、対日攻勢の軸を南太平洋と中部太平

[3] Ibid.
[4] Ibid., p. 764.
[5] Ibid., p. 765.
[6] Ibid., p. 773.

洋の二正面に分けたことの是非、中国の扱い、原爆の投下等が問題として取り上げられる場合が多い[7]。

2　個別研究の紹介

（1）公刊戦史

アメリカでは終戦後間もなくからアメリカの対日戦争指導史の研究が始まった。1947年に陸軍および海軍がそれぞれの公刊戦史を刊行し始めたのを皮切りに、陸軍航空および海兵隊もそれぞれの公刊戦史を編纂し始め、統合参謀本部も自らの活動史を、太平洋戦争に関するものに限って出版した。

統合参謀長会議およびそれぞれの軍種が出版した公刊戦史の内、戦略に関するものは、以下の通りである。

統合参謀長会議

Grace Person Hayes, *The History of the Joint Chiefs of Staff in World War II: The War Against Japan* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 1982)

陸軍

The U.S. Army in World War II のシリーズの中の、次の各巻：

Maurice Matloff and Edwin M. Snell, *Strategic Planning for Coalition Warfare 1941-1942* (Washington, D.C.: Office of the Chief of Military History, Department of the Army, 1953)

Maurice Matloff and Edwin M. Snell, *Strategic Planning for Coalition Warfare 1943-1945* (Washington, D.C.: Office of the Chief of Military History, Department of the Army, 1959)

Richard M. Leighton and Robert W. Coakley, *Global Logistics and Strategy, 1940-1943* (Washington, D.C.: Office of the Chief of Military History, Department of the Army, 1955)

Richard M. Leighton and Robert W. Coakley, *Global Logistics and Strategy, 1943-1945* (Washington, D.C.: Office of the Chief of Military History, Department of the

[7] Mark A. Stoler and Melanie S. Gustafson, eds., *Major Problems in the History of World War II* (Boston, Massachusetts: Houghton Mifflin, 2003), pp. 75, 110, 173, 361, 395.

Army, 1969)

Ray S. Clive, *Washington Command Post: The Operations Division* (Washington, D.C.: Office of the Chief of Military History, Department of the Army, 1951)

Louis Morton, *Strategy and Command: The First Two Years* (Washington, D.C.: Office of the Chief of Military History, Department of the Army, 1962)

海軍

Samuel Eliot Morison, *History of United States Naval Operations in World War II* (15 vols., Little, Brown, 1947-1962)

空軍

Wesley Frank Craven and James Lea Cate, eds., *The Army Air Forces in World War II* (7 vols., University of Chicago Press, 1948-1958)

海兵隊

Henry I. Shaw et al., History and Museums Division, HQMC, *History of U.S. Marine Corps Operations in World War II* (5 vols., Government Printing Office, 1958-1971)

分量、発行の時期、中身（重点の置き方、対象等）については差異があるが、それぞれの公刊戦史は共通して、客観的で学術水準が高い内容のものを求めるという編集方針に従って作成された。その要求は大体のところ満たされたと言われており、編纂後数十年経った今日でも、これらの公刊戦史は研究史料として十分価値があるものと評価されている。例えば、H・P・ウィルモットの言葉を借りると、「アメリカ陸軍、空軍および海兵隊の公刊戦史は、その一部が執筆後 40 年以上も経っており、その多くが過去 10 年間に再版されているが、いまだに批判的な査読に耐えうるものであり、現在も入手しうるものとしてはそれぞれのテーマについて今日においても最も優れた出発点である」のである[8]。

このように、軍事戦略については、それぞれの公刊戦史の学術的水準が極めて高く、その後の歴史研究にも十分有用であったこともあり、太平洋戦争全般の狭義の軍事戦略と軍の戦争指導だけに焦点を絞った研究は、その後あまり多くは出版されていない。そこで、次にその他の太平洋戦争の研究を検討する。

[8] H. P. Willmott, *The Second World War in the Far East* (Washington, D.C.: Smithsonian Books, 1999), p. 226.

（2）大戦略及び戦争指導に関する研究

先述の通り、アメリカにおける研究には「アメリカの戦争指導」を正面から取り上げたものはあまり見当たらないが、それに相当する研究書がないわけでもない。比較的最近の研究で注目されるのは、マーク・ストーラーの *Allies and Adversaries*（2000 年）である[9]。この中でストーラーは、米英間、あるいは米ソ間の協調と対立の関係に焦点を当て、さらにはアメリカ内では大統領、国務省、陸海軍の意見の対立、あるいは陸軍、海軍それぞれの内部の意見の対立と、それぞれが調整された過程をも視野に入れて、第二次世界大戦直前から終戦までアメリカの戦略がどのように形成されたのかを詳細に分析した。さらに、アメリカの対外政策の形成過程において、軍部が戦前から戦時中にかけて受け身の立場から中心的なアクターに変身する過程も分析された。また、戦時中はイギリスおよびソ連は同盟国であったが、戦後はアメリカのライバルになる可能性がかなり大きいと考えられ、同盟国を同時に潜在的敵国として考えなければならないことが、アメリカの政治および軍の指導者たちに与えた影響も取り上げられた。戦前から戦時中のアメリカの政治および軍の指導者たちの世界戦略の考え方や構想、そして計画立案が対象とされており、本稿との関係では、比較的最近に出版されたものの中では「アメリカの戦争指導」をもっとも正面から捉えた研究であると言える。なお、ストーラーはその後、米英の戦時同盟関係に焦点を当てた *Allies in War*（2005 年）も出版した[10]。

第二次世界大戦におけるアメリカの空軍戦略を取り上げ、同国の戦争指導の一面を分析したのはコンラッド・クレーンの *Bombs, Cities and Civilians*（1993 年）である[11]。考察の対象は日本とドイツに対する戦略爆撃であり、それぞれにおける爆撃の計画と実行における道徳的な制約と爆撃の効果が分析された。原爆投下の問題に関しては、原爆投下の決断よりむしろ、対日爆撃の方法を高々度精密爆撃から夜間の低空無差別爆撃に切り替えた決断のほうが、「人道上の考慮」という敷居を跨ぐという意味で難しいものであり、夜間・低空無差別爆撃に踏み切っていたので、その分、原爆投下の決断への抵抗感は低かった、とクレーンは主張した。

第二次世界大戦におけるアメリカの軍事戦略そのものを分析した研究の例として、エリオット・コーエンの論文“The Strategy of Innocence?”（1994 年）、D・クレイトン・ジェ

---

[9] Mark A. Stoler, *Allies and Adversaries: The Joint Chiefs of Staff, the Grand Alliance, and U.S. Strategy in World War II* (Chapel Hill, North Carolina: University of North Carolina Press, 2000).

[10] Mark A. Stoler, *Allies in War: Britain and America Against the Axis Powers, 1940-1945* (London: Hodder Education, 2005).

[11] Conrad C. Crane, *Bombs, Cities, and Civilians: American Airpower Strategy in World War II* (Lawrence, Kansas: University Press of Kansas, 1993).

ームスの“American and Japanese Strategies in the Pacific War”（1985 年）を挙げることができる。エドワード・ミラーの *War Plan ORANGE*（1991 年）において、対日戦争を想定した「オレンジ計画」が、その誕生から太平洋戦争の終わりまでどのように変遷したのかが考察されており、時代毎の内容、改正の動機、背景、同計画を巡る海軍内および陸海軍間の対立等が詳細に分析されている[12]。

最後に、アメリカの戦争指導の研究として、「軍事的有効性」（military effectiveness）という分析概念を用いた研究にも触れなければならない。その手法を用いて第二次世界大戦におけるアメリカ軍の有効性を分析したのは、アラン・ミレットの論文”The Effectiveness of the American Military Establishment”（1988 年）である[13]。

「軍事的有効性」はミレットとウィリアムソン・マレーが考え出した分析概念であり、当時としては新しいアプローチであった。過去の戦争を研究し、将来の軍の在り方を考えるに当たって、従来の「作戦の分析」（operational analysis）に基づく研究では不十分と考えた両氏は、この新しいアプローチを編み出し、ヨーロッパの列強の他、日米の軍を比較研究した。彼らによると、「軍事的有効性」とは、軍事組織が様々な資源を戦闘力に変換する過程の評価のことである。最も有効性が高い軍事組織は、物理的および政治的に利用しうる資源から最大限の戦闘力を得る組織である。ここでいう「資源」とは、人材、天然資源、予算、技術力、産業基盤、政府の構造、社会学的特質、政治資本、軍事指導者の知的な資質、そして士気である。また、軍事組織に対する制約も考慮されなければならないとされ、そのような制約に地理、天然資源、経済システム、人口、時間、気候といった自然のものの他に、国家としての政治及び外交の目標、軍に対する世論の姿勢、会戦の条件、そして一般市民の士気が含まれる[14]。

さらに、軍事組織は政治、戦略、作戦及び戦術の四つのレベルで活動するものであり、それぞれにおける当該組織の有効性が評価されなければならないとされた。そして、それぞれのレベルにおいて、いくつかの具体的な点を考察することにより、ある軍事組織の有効性を判断することができる、とする分析方法である[15]。

この分析方法を用いて太平洋戦争におけるアメリカ軍の有効性を分析した結果、総合的

---

[12] Edward S. Miller, *War Plan ORANGE: The U.S. Strategy to Defeat Japan, 1897-1945* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 1991).
[13] Allan R. Millett, “The United States Armed Forces in the Second World War,” in Allan R. Millett and Williamson Murray, eds., *Military Effectiveness, Volume 2: The Second World War* (New Edition) (New York, New York: Cambridge University Press, 2010).
[14] Allan R. Millett, Williamson Murray and Kenneth H. Watman, “The Effectiveness of Military Organizations,” in Allan R. Millett and Williamson Murray, eds., *Military Effectiveness, Volume 1: The First World War* (New Edition) (New York, New York: Cambridge University Press, 2010), pp. 2-3.
[15] Ibid., pp. 4-26.

な評価は高いものであったが、一方で物量で敵を圧倒したことをアメリカの勝利の要因としてきた従来の定説を覆す結論も導き出された。つまり、アメリカ軍は単に物量で勝ったから戦争に勝利を収めたのではなくて、軍事組織として各種の資源を戦力に変換する能力に長けていたから勝った、とミレットは主張した[16]。ただし、アメリカの勝利は参戦した時から必然的であったのではなくて、戦争中にアメリカの政治および軍の指導者が学習し、必要な改革を随所で実行したからアメリカ陸海軍は最終的に勝利したということも指摘された[17]。

（3）人物研究

アメリカでは第二次世界大戦の政治および軍の主要な指導者の研究も早くから行われており、歴史研究として優れた作品も数多く出版されている。

戦時中のアメリカの指導者の研究と言えば、まず最高司令長官であったローズベルト大統領の研究を取り上げなければならない。ローズベルト研究は多数出版されてきたが、1960 年代後半までは、ローズベルトの戦時対外政策を批判的に評価するものが主流であり、これらはローズベルトの理想主義が戦後のソ連の勢力拡大政策を許してしまった背景にあり、その意味で米ソ冷戦のきっかけとなった、と主張するものが多かった[18]。

この批判的な傾向に対して、陸軍の公刊戦史編纂に携わった歴史研究者と、その公刊戦史を使用した研究者が原動力となって、1960 年代の後半から反動が起った。彼らはローズベルトの戦時政策と戦略はナイーヴなものであったのではなくて、むしろ非常に現実的であり、また、ローズベルトがアメリカ軍部の指導者に操られていたのではなく、むしろ軍部をしっかり統制していた、と主張した[19]。例えば、ジェームス・バーンズは *Roosevelt: the Soldier of Freedom*（1970 年）において、ローズベルトは非常に実利主義的かつ現実主義的であり、その実利主義が米英ソの戦時同盟の接着剤として機能したが、一方でローズベルトが期待したような米英ソ間の戦後協力関係を不可能なものにした、と述べた[20]。

ローズベルトを現実主義者として捉える研究に対する反動として、いわゆる「ニューレフト」（新左翼）からさらに批判的な研究が出されたが、アメリカの戦時の膨大な量の史料の大半が 1970 年代に公開されたことにより、ローズベルトの様々な決定の背景にあった

16 Millett, op. cit.“The United States Armed Forces in the Second World War,” p. 84.
17 Ibid.
18 Mark A. Stoler, “A Half-Century of Conflict: Interpretations of U.S. World War II Diplomacy,” in Michael J. Hogan, ed., *America in the World: The Historiography of American Foreign Relations Since 1941* (New York, New York: Cambridge University Press, 1995), pp. 168-171.
19 Ibid., pp. 171-172.
20 James MacGregor Burns, *Roosevelt: the Soldier of Freedom* (New York, New York: Konecky and Konecky, 1970).

要因をより正確に把握することが可能になった。そして、よりバランスが取れたローズベルト像を描くために、それまでの様々な視点から書かれたローズベルト研究を収斂させる試みが行われるようになった[21]。その代表例はロバート・ダレックの *Franklin D. Roosevelt and American Foreign Policy*（1979 年）である[22]。その中でダレックはローズベルトが非常に現実主義的であり、様々な国内的および国際的要因の制約を受けながらアメリカの世界戦略を決定した、と指摘した。

大統領レベル以下の主要な指導者の人物研究はほぼ出そろっており、「決定版」と評されるものも多い。例えば、フォレスト・ポーグによる陸軍参謀総長ジョージ・C・マーシャルの四部作 *George C. Marshall*（1963~1987 年）が有名であるが、その第２巻と第３巻が第二次世界大戦期を対象としたものである[23]。これらはどちらかと言えばヨーロッパ戦線におけるアメリカの戦争指導を中心に書かれている。なお、マーシャルとアメリカの戦争指導の研究はその後も出ており、例えばエド・クレーの *General of the Army*（1990 年）の他、マーク・ストーラーの *George C. Marshall*（1989 年）を挙げることができる[24]。

アメリカの対日戦はアメリカ海軍が中心となっていたので、海軍作戦部長アーネスト・キングの研究はアメリカの対日戦争指導の研究として重要な位置を占める。その決定版とされるのは、トマス・ビュエルの *Master of Sea Power*（1980 年）である[25]。アメリカの国益の中身や将来の戦略と作戦方針等を巡って、アメリカ海軍部内において様々な意見の対立があった他、海軍全体の意見が陸軍、大統領あるいはイギリスのそれとしばしば衝突したが、ビュエルはキングというレンズを通して、これらの意見の衝突の内容と、それらが調整された過程を分析した。

太平洋正面の陸海空軍の主要な指導者の研究もかなり出版されてきた。ダグラス・マッカーサーについては、朝鮮戦争における同氏の問題もあり、数多くの研究が発表されているが、D・クレイトン・ジェームスの *The Years of MacArthur*（1975 年）の第２巻が太平洋戦争を対象としており、マッカーサー研究の中では比較的公平で優れたものとされて

---

[21] アメリカ陸軍がこの時期に公開した史料だけでも、総重量が１万 7120 トンもあった。 Stoler, "Half-Century of Conflict," p. 175.

[22] Robert Dallek, *Franklin D. Roosevelt and American Foreign Policy, 1932-1945* (New York, New York: Oxford University Press, 1979).

[23] Forrest C. Pogue, *George C. Marshall: Ordeal and Hope, 1939-1942* (New York, New York: Viking Press, 1965). Forrest C. Pogue, *George C. Marshall: Organizer of Victory, 1943-1945* (New York, New York: Viking Press, 1973).

[24] Ed Cray, *General of the Army: George C. Marshall, Soldier and Statesman* (New York, New York: W. W. Norton and Co., 1990). Mark A. Stoler, *George C. Marshall: Soldier-Statesman of the American Century* (New York, New York: Twayne Publishers, 1989).

[25] Thomas B. Buell, *Master of Sea Power: A Biography of Fleet Admiral Ernest J. King* (Boston, Massachusetts: Little, Brown and Company, 1980).

いる[26]。その他に、マイケル・シャーラーの *Douglas MacArthur*（1989 年）もマッカーサーの対日戦争指導を分析したものである[27]。

対日戦に関係した陸軍の指導者を取り上げた最近の研究はケビン・ホルツィマーの *General Walter Krueger*（2007 年）である[28]。クルーガーはアメリカ第 6 軍の司令官であり、ニューギニア戦の他、フィリピン戦でも活躍したが、ホルツィマーはクルーガーの人物を研究する他に、クルーガー司令官というレンズを通して上位の司令官であったマッカーサーの統帥の哲学、アメリカの戦略思想とドクトリン、兵站の問題等、より上のレベルの戦争指導の様々な側面も考察し、それらが一人の軍司令官としてのクルーガーにどのように作用したのかを分析した。

一方の海軍については、E・B・ポッターの *Nimitz*（1976 年）が太平洋艦隊司令長官チェスター・ニミッツの研究として定評である[29]。同書はニミッツの作戦指導の実態やその戦略思想その他の考えを分析しており、ニミッツの視点から見たアメリカの対日戦争指導を理解する上で優れた研究である。

いわゆる現場指揮官の人物研究もかなり発表されている。海軍については比較的早くから出版されており、例えばウィリアム・ハルゼーを取り上げた E・B・ポッターの *Bull Halsey*（1985 年）[30]、レイモンド・スプルアンスを対象としたトマス・ビュエルの *The Quiet Warrior*（1974 年）[31]が定評である。最近ではジョン・ランドストロムがサンゴ海海戦やミッドウェー海戦で活躍した海軍のフランク・フレッチャーの研究 *Black Shoe Admiral*（2006 年）を発表した[32]。フレッチャーは作戦の要所毎に決断力を欠き、作戦の指揮が消極的であった、とモリソン等に批判されがちであったが[33]、ランドストロムは航海日誌等の一次史料を再度熟読して、そのような批判は必ずしも的を射ておらず、むしろフレッチ

---

[26] D. Clayton James, *The Years of MacArthur*, Vol. 2: 1941-1945 (Boston, Massachusetts: Houghton Mifflin, 1975). Barlow, op. cit. "American and Allied Strategy and Campaigns," in Lee, ed., op. cit., p. 83.

[27] Michael Schaller, *Douglas MacArthur: The Far Eastern General* (New York, New York: Oxford University Press, 1989).

[28] Kevin C. Holzimmer, *General Walter Krueger: Unsung Hero of the Pacific War* (Lawrence, Kansas: University Press of Kansas, 2007).

[29] E. B. Potter, *Nimitz* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 1976).

[30] E. B. Potter, *Bull Halsey* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 1985).

[31] Thomas B. Buell, *The Quiet Warrior: A Biography of Admiral Raymond A. Spruance* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 1987). (Original edition, Boston, Massachusetts: Little, Brown and Company, 1974.)

[32] John B. Lundstrom, *Black Shoe Carrier Admiral: Frank Jack Fletcher at Coral Sea, Midway and Guadalcanal* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 2006).

[33] Samuel Eliot Morison, *History of United States Naval Operations in World War II, Volume III: The Rising Sun in the Pacific 1931-April 1942* (Boston, Massachusetts: Little, Brown and Company, 1948), pp. 243-244. Samuel Eliot Morison, *History of United States Naval Operations in World War II, Volume V: The Struggle for Guadalcanal, August 1942-February 1943* (Boston, Massachusetts: Little, Brown and Company, 1948), pp. 27-28.

ャーは適度に慎重であり、冷静に自らの状況を良く把握しながら作戦を進めた優れた提督であったと主張し、フレッチャーを再評価した。また、このような作戦指導は、空母部隊を中心とする残存の艦隊を温存することをも重視した対日開戦後数カ月間のアメリカの戦争指導方針に合致しており、その意味でもフレッチャーは優れた指揮官であった、とランドストロムは指摘した。

従来はあまり脚光を浴びることがなかった司令官、指揮官の研究も出始めている。アメリカ陸軍については、第 6 軍司令官クルーガーの研究が執筆されたのは上述の通りである。一方の海軍については、クラーク・レイノルズは *On the Warpath in the Pacific*（2005 年）において海軍のジョッコー・クラークの研究を発表した[34]。太平洋戦争前半においてクラークは、空母ヨークタウンの艦長であり、後半は任務部隊の指揮官であったが、戦闘部隊の指揮官というレンズを通してアメリカの対日戦争指導全体を考察した点と、その指揮官が対日軍事戦略全体という大きな背景の中でどのように作戦を決定し実行したのか、という構成は先のクルーガー研究と類似している。

（4）通史

太平洋戦争の通史は比較的早くから書かれており、どちらかと言えば一般向けの、いわゆる「大衆の歴史」（「ポピュラーヒストリー」、popular history）に分類されるものも多いが、アメリカの対日戦争指導の大きな流れと、太平洋戦争の全体像を把握するのに有用なものもある。ジョン・トーランドの *The Rising Sun*（1970 年）はこのような「大衆の歴史」であるが、日本の関係者の聞き取り調査も随所に活用しており、指導者から一般兵や民間人のレベルまで日本人の視点も大いに取り入れた通史として有名である[35]。その他にも、ポール・ケネディーによる *Pacific Onslaught* と *Pacific Victory*（1972~73 年）[36]、ハリー・ゲイリーによる *The War in the Pacific*（1995 年）[37]、ウィリアム・ホプキンズの *The Pacific War*（2008 年）[38]などを挙げることができる。先のトーランドによる作品と同様、これらは太平洋戦争の全体像を把握するのに有用であるだけでなく、アメリカ人

---

[34] Clark G. Reynolds, *On the Warpath in the Pacific: Admiral Jocko Clark and the Fast Carriers* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 2005).
[35] John Toland, *The Rising Sun: The Decline and Fall of the Japanese Empire, 1936-1945* (New York, New York: Random House, 1970).
[36] Paul Kennedy, *Pacific Onslaught: 7th Dec. 1941/7th Feb. 1943* (New York, New York: Ballantine Books, 1972). Paul Kennedy, *Pacific Victory* (New York, New York: Ballantine Books, 1973).
[37] Harry A. Gailey, *The War in the Pacific: From Pearl Harbor to Tokyo Bay* (Novato, California: Presidio Press, 1995).
[38] William B. Hopkins, *The Pacific War: The Strategy, Politics and Players that Won the War* (Minneapolis, Minnesota: Zenith Press, 2008).

が戦後、どのように太平洋戦争と日本を認識してきたのか、あるいは、太平洋戦争のどのような側面や争点に関心があったのかを知る上で示唆に富んでいる。同時に、これらの通史はアメリカの視点に重点が置かれているという問題点も抱えており、例えば、概してアジア大陸における作戦と戦闘（日中戦争および 1945 年 8 月のソ連による満州侵攻）およびビルマ方面の日英間の作戦の細かい記述と分析が欠如している傾向がある。

一方で、研究書としての価値も高い通史も出ており、例えば 1985 年に出版されたロナルド・スペクターの *Eagle Against the Sun* は、学術的価値が高いものとして評価されている[39]。日米間の開戦経緯から終戦までを対象とし、日米双方の視点で書かれているが、一方でやはり日米戦の記述が中心で、真珠湾攻撃後の日中戦争、あるいはビルマ及びインド方面の作戦はあまり詳細に扱われていない。

アラン・ミレットとウィリアムソン・マレーによる *War to be Won*（2000 年）は第二次世界大戦全般、つまり、太平洋戦争の他にヨーロッパ方面の戦争も取り上げたものであるが、日米戦争の他にビルマ及びインド方面や中国での作戦にも相応の枚数を割いており、よりバランスが取れた太平洋戦争全体の研究である[40]。等松春夫とＨ・Ｐ・ウィルモットの共著 *A Gathering Darkness*（2004 年）は開戦前から 1942 年半ばまでの戦局の推移を考察し、日米間の戦争の他に、中国、ビルマ、インドの情勢にも目を向けた優れた研究である[41]。

ウィルモットは 1942 年 5 月から 1943 年 10 月までの期間に対象を限定した *The War with Japan*（2002 年）も記しており、日本の攻勢作戦が行き詰まり、アメリカの反攻の端緒となった一連の作戦、つまり、珊瑚海海戦、ミッドウェー海戦、ガダルカナル島及びニューギニア島の諸作戦に焦点を当てて日英米の戦略と作戦を分析した[42]。ウィルモットは *The Second World War in the Far East*（1999 年）も出しており、同書はどちらかと言えば概説書であるが、アメリカの戦争指導の全体像を把握するのに有用な研究である[43]。

最後に、イギリス人ジョン・コステロの *The Pacific War*（1981 年）はマレー半島、ビルマ及びインド方面の作戦をかなり重視しており、イギリスの視点を把握するのに役に立つ通史である[44]。

---

[39] Ronald Spector, *Eagle Against the Sun: The American War with Japan* (New York, New York: Vintage Books, 1985).

[40] Williamson Murray and Allan R. Millett, *A War to be Won: Fighting the Second World War* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2000).

[41] Haruo Tohmatsu and H. P. Wilmott, *A Gathering Darkness: The Coming of War to the Far East and the Pacific, 1921-1942* (Lanham, Maryland: SR Books, 2004).

[42] H. P. Wilmott, *The War with Japan: The Period of Balance, May 1942-October 1943* (Wilmington, Delaware: Scholarly Resources Inc., 2002).

[43] H. P. Wilmott, *The Second World War in the Far East* (Washington, D.C.: Smithsonian Books, 1999).

[44] John Costello, *The Pacific War* (New York, New York: Atlantic Communications, 1981).

（5）組織の研究

アメリカでは軍事に関わる組織の歴史も盛んに研究されている。例えば、アラン・ミレットとピーター・マスラウスキーの共著 *For a Common Defense*（改訂増補版、1994 年）は、建国以来のアメリカ軍の通史であるが、アメリカ陸軍と海軍の組織と制度の変遷、戦略や作戦思想、戦争指導の発展と変化が詳細かつ明晰に記述されており、太平洋戦争におけるアメリカの戦略の背景にある組織的な要因が分かりやすく分析されている[45]。

個別の軍種については、まず陸軍の組織史の代表例はラッセル・ワイグリーの *History of the United States Army*（1967 年）である。戦争指導や作戦戦闘に関する記述はあまり多くないが、陸軍の組織の発展に重点を置いており、1960 年代半ばまでの陸軍の優れた研究である[46]。海軍の組織研究の代表的な作品としては、ジョージ・バイエルの *One Hundred Years of Sea Power*（1994 年）がある[47]。バイエルはアメリカ海軍が 19 世紀末以降、大海軍に発展する過程に焦点を当てており、太平洋戦争におけるアメリカ海軍関連の戦争指導、作戦指導も詳細に分析した。海兵隊の創設以降の歴史については、アラン・ミレットの *Semper Fidelis*（1980 年）が定評である[48]。太平洋戦争の関連では、戦間期における水陸両用作戦の研究とそれを実戦に移した過程が詳しく分析されている。また、海兵隊はそのミッションと必要性を巡って他の軍種と頻繁に対立を繰り返しながら組織として発展を遂げたが、それらの経緯についても同書は詳しい。

このように、アメリカ軍の組織の研究は、決して数は多いとは言えないし、必ずしも太平洋戦争中の戦争指導や作戦指導を詳細に分析したものばかりでもないが、その大きな背景となった組織的な要因を理解するためには参考になる。

（6）作戦・戦闘史

作戦・戦闘史の研究は従来からアメリカで盛んに行われており、それぞれは特定の作戦あるいは戦闘を取り上げているが、その背景となった戦略と戦争指導も詳細に考察しており、その作戦と戦闘の結果、戦略と戦争指導が受けた影響をも説明しているものが多いので、アメリカの対日戦争指導とその実践としての作戦・戦闘の相関関係を理解する上で非

---

45 Peter Maslowski and Allan R. Millett, *For the Common Defense: A Military History of the United States of America*, Revised and Expanded Edition (New York, New York: Free Press, 1994).
46 Russell F. Weigley, *History of the United States Army* (Bloomington, Indiana: Indiana University Press, 1967 (enlarged edition, 1984)).
47 George W. Baer, *One Hundred Years of Sea Power: The U.S. Navy, 1890-1990* (Palo Alto, California: Stanford University Press, 1994).
48 Millett, op. cit. *Semper Fidelis*.

常に有意義である。

このような研究を全てここで網羅することは不可能なので、比較的最近出版されたものを中心に、注目に値すると思われるものを以下において紹介した。まず、真珠湾作戦の研究として今日まで高く評価されているのがゴードン・プランゲの *At Dawn We Slept*（1981 年）である[49]。開戦経緯についての分析の他、開戦に当たっての日米双方の戦略も考察の対象となっている。プランゲが数年後に出した *Pearl Harbor*（1986 年）は、いわゆるローズベルトの陰謀説に反駁するものであったが、開戦直前のアメリカ陸海軍の戦略や戦争指導の組織や構想の分析もなされており、開戦当初のアメリカ陸海軍の研究としても有用である[50]。ジョン・バートンは *Fortnight of Infamy*（2006 年）において開戦以降の二週間に焦点を当て、その間にハワイ及び西太平洋においてアメリカの航空戦力が壊滅状態になり、制空権の喪失が開戦直後の日本の圧倒的な軍事的優勢をもたらした最も決定的な要因であった、と主張した[51]。グレゴリー・アーウィンはウェーキ島攻略作戦を取り上げた *Facing Fearful Odds*（1997 年）において、開戦前からの日米の戦争計画と開戦直後の日米の戦争指導を分析した[52]。ウェーキ島守備隊の個々人が戦闘中および捕虜収容所において体験したことも詳細に調べており、戦略及び戦争指導レベルの分析と現場の個人の体験の調査の双方を行っているという意味で、アメリカにおける軍事史研究の最近の傾向の優れた例である。

ジョン・ランドストロムは、アメリカの海軍航空の戦闘機隊に焦点を当て、真珠湾作戦からミッドウェー作戦までのその活躍を *The First Team*（1984 年）にまとめ上げた[53]。そして、続編としてガダルカナル戦における海軍の戦闘機隊の活動を *The First Team and the Guadalcanal Campaign*（1994 年）として出版した[54]。それぞれにおいて海軍戦闘機隊の作戦と戦闘の実態が詳細に説明されており、空母部隊を中心とした初期のアメリカの対日戦争指導も分析され、開戦後一年間のアメリカの戦争指導の研究として両方とも必読書と言える。

ミッドウェー戦については、ジョナサン・パーシャルとアンソニー・タリーの最近の共

---

[49] Gordon Prange, *At Dawn We Slept: The Untold Story of Pearl Harbor* (New York, New York: McGraw-Hill Book Company, 1981).
[50] Gordon Prange, with Donald M. Goldstein and Katherine V. Dillon, *Pearl Harbor: the Verdict of History* (New York, New York: McGraw-Hill Book Company, 1986).
[51] John Burton, *Fortnight of Infamy: The Collapse of Allied Airpower* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 2006).
[52] Gregory J. W. Urwin, *Facing Fearful Odds: The Siege of Wake Island* (Lincoln, Nebraska: University of Nebraska Press, 1997).
[53] John B. Lundstrom, *The First Team: Pacific Naval Air Combat from Pearl Harbor to Midway* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 1984).
[54] John B. Lundstrom, *The First Team and the Guadalcanal Campaign: Naval Fighter Combat from August to November 1942* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 1994).

著 *Shattered Sword*（2005 年）が優れている[55]。両氏は防衛研修所戦史室が編纂した『戦史叢書』をはじめ、日本語の文献と史料を詳細に分析し、ミッドウェー戦に関して今まで定説とされてきた様々な「事実」が「神話」であることを証明した。戦闘の経過がより正確に説明されるとともに、ミッドウェー海戦に至る日米の戦略や戦争指導も詳細に分析されており、さらに、例えば空母部隊及び母艦航空隊の運用ドクトリンの日米の比較等、作戦・戦術レベルの様々な分析もされていて、大変読み応えのある一冊である。

ガダルカナル戦を日米双方の視点から分析したものとして、リチャード・フランクの *Guadalcanal*（1990 年）が定評である[56]。同書は日米の既存の研究の他、両国の一次史料も使用しており、さらに、執筆当時に公開されつつあったアメリカの情報関係の史料も使い、戦争指導レベルから個々の戦闘における個人としての兵士の体験をも分析の対象とした力作である。

ガダルカナル戦に並行して闘われたブナの争奪戦を始めとするニューギニア戦は、アメリカの太平洋戦争研究の中で、長年「忘れられた戦域」であったが、最近はそれを取り上げた研究書も出るようになった。ハリー・ゲイリーの *MacArthur Strikes Back*（2000 年）は日本のポートモレスビー陸路攻略作戦からブナ地区争奪戦までを取り上げた研究であり、アメリカの視点を中心に書かれているが、ニューギニア戦を扱った数少ない研究書の一つとしての価値がある[57]。ゲイリーはアメリカ軍のラエ地区攻略作戦からニューギニア島西端の制圧に至るまでの作戦を対象とした *MacArthur's Victory*（2004 年）と[58]、ブーガンビル島攻略作戦を分析した *Bougainville, 1943-1945*（1991 年）も出版しており[59]、いずれもアメリカの視点に偏重しているきらいはあるが、それぞれの戦域におけるアメリカの戦争指導から作戦戦闘までを理解するには十分である。

ニューギニア戦を取り上げた研究はその他にも次々と出版されている。例えば、ステフェン・タッフェの *MacArthur's Jungle War*（1998 年）は、ホランジア攻略作戦からビアク戦までの、ニューギニア戦の後半を取り上げた[60]。*MacArthur's Eagles*（2005 年）においてレックス・マカーレーは、ニューギニア方面におけるアメリカ及びオーストラリア軍

---

55 Jonathan Parshall and Anthony Tully, *Shattered Sword: The Untold Story of the Battle of Midway* (Washington, D.C.: Potomac Books Inc., 2005).
56 Richard Frank, *Guadalcanal* (New York, New York: Random House, 1990).
57 Harry A. Gailey, *MacArthur Strikes Back: Decision at Buna, New Guinea 1942-1943* (Novato, California: Presidio Press, 2000).
58 Harry A. Gailey, *MacArthur's Victory: The War in New Guinea, 1943-1944* (Novato, California: Presidio Press, 2004).
59 Harry A. Gailey, *Bougainville, 1943-1945: the Forgotten Campaign* (Lexington, Kentucky: The University Press of Kentucky, 1991).
60 Stephen R. Taffe, *MacArthur's Jungle War: The 1944 New Guinea Campaign* (Lawrence, Kansas: The University Press of Kansas, 1998).

の空軍戦略及び作戦に焦点を当てた[61]。

アメリカ軍の中部太平洋進攻作戦からフィリッピン攻略に至る作戦・戦闘の研究は従来から盛んに行われている。例えば、ウィリアム・イブラッドの *Red Sun Setting*（1981 年）は、アメリカ側の視点を中心に書かれたものであるが、アメリカ人研究者によるマリアナ沖海戦の研究として高い評価を受けている[62]。ドナルド・ミラーの *D-Days in the Pacific*（2005 年）の対象とする時期はガダルカナル戦から沖縄戦までであるが、この期間のアメリカの対日作戦は水陸両方の強襲上陸作戦の連続であり、規模の差はあるものの、その多くはノルマンディ上陸作戦に匹敵する、というのが筆者の視点である[63]。

フィリピン島奪還作戦に関連するものとして、H･P･ウィルモットの *The Battle of Leyte Gulf*（2005 年）は、日米双方の視点からレイテ沖海戦を再検討した優れた研究である[64]。筆者は史上最後の艦隊決戦となった同海戦に至る日米それぞれの戦略と戦争指導の詳細な分析の他に、海戦そのものの経緯と、その後の日米の戦争指導への影響も丹念に調べ上げた。

日米戦争の最後の年におけるアメリカの作戦・戦闘の研究の比較的最近の例は以下の通りである。硫黄島戦を取り上げたロバート・ビュレルの論文“Breaking the Cycle of Iwo Jima Mythology”（2004 年）と、それを基にした研究書 *The Ghosts of Iwo Jima*（2006 年）は、アメリカ側から見た硫黄島攻略作戦の戦略的背景を再検討したものである[65]。本土上陸作戦を取り上げたリチャード・フランクの *Downfall*（1999 年）は、太平洋戦争の最終局面を対象とした研究である[66]。日米双方の視点から書かれた同書においてフランクは、当時公開が進んでいた情報関係の史料も使って、本土上陸作戦の是非をめぐるアメリカ側の戦争指導レベルの議論を詳細に分析した。そして、日本側の「決」号作戦の正確な情報を把握していたので、アメリカ側は九州上陸作戦を見合わせ、日本の外交工作の情報も得たことにより、アメリカ側の指導者は交渉による戦争終結の見込みが低いと判断した、などと結論付けた。

サイパン島を拠点とした日本への爆撃作戦は日本を敗北に追い込む重要な要因となった

---

61 Lex McAulay, *MacArthur's Eagles: The U.S Air War over New Guinea, 1943-1944* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 2005).
62 William T. Y'Blood, *Red Sun Setting: The Battle of the Philippine Sea* (Annapolis, Maryland: Naval Institute Press, 1981). Willmott, *Second World War in the Far East*, p. 227.
63 Donald L. Miller, *D-Days in the Pacific* (New York, New York: Simon and Schuster, 2005).
64 H. P. Willmott, *The Battle of Leyte Gulf: The Last Fleet Action* (Bloomington, Indiana: Indiana University Press, 2005).
65 Robert S. Burrell, "Breaking the Cycle of Iwo Jima Mythology: A Strategic Study of Operation Detachment." *The Journal of Military History* 68 (October 2004), pp. 1143-1186. Robert S. Burrell, *The Ghosts of Iwo Jima* (College Station, Texas: Texas A&M University Press, 2006).
66 Richard B. Frank, *Downfall: The End of the Imperial Japanese Empire* (New York, New York: Random House, 1999).

が、アメリカの対日戦略爆撃作戦を取り上げた研究として、先に紹介したクレーンの *Bombs, Cities, and Civilians* が優れている。その他に、ウィルバー・モリソンの *Point of No Return*（1979 年）が第 20 空軍の司令部を中心に、対日戦略爆撃の戦略と戦争指導レベルの考慮をも考察した有意義な研究であり、一読に値する[67]。

その他に、例えば沖縄戦に関するビル・スローンの *The Ultimate Battle*（2007 年）[68]のように、将官から下士官・兵に至るまでの「個人の体験としての戦争」という視点から書かれていながら、大きな背景としての対日戦略と戦争指導の経緯も分析したものも、対日戦の研究の最近の傾向の例として挙げることができる。

（7）個別争点

上述のような特定の「戦略」「作戦・戦闘」あるいは「人物」という区切り方とは別に、ある争点を中心にした研究が最近、アメリカでは盛んに行われている。例えば、リチャード・オヴァリーの *Why the Allies Won*（1995 年）は、戦争が開始された時点で連合国の勝利は必ずしも必然的ではなかったにも拘わらず、なぜ連合国は第二次大戦に勝利したのか、という問題意識から書かれており、主要な参戦国の戦略と作戦の他に、制海権の争奪戦、敵対意識とナショナリズム、戦略爆撃、動員と戦時経済、技術開発、思想と道徳、そして指導者の資質と適正等の要因を比較した[69]。戦争指導という意味では主要国の指導者の比較が最も興味深く、連合国の指導者のほうが学習能力や柔軟性等の点で戦時指導者としての適性に長けていたことの他に、戦争指導上の意思決定の組織やメカニズムも連合国の方が優れていた、というのがオヴァリーの結論である。

個別の争点を中心に書かれたものとして、エリック・ベルゲルッドの *Fire in the Sky*（2000 年）も読みごたえのある一冊である[70]。ベルゲルッドが取り上げたのは 1942 年夏から 1943 年末ごろまでの南太平洋における日米の航空戦であるが、その時期の、その地域における航空戦こそが太平洋戦争の趨勢を決定したものである、という考えから出発し、航空戦の勝敗に決定的な役割を演じた搭乗員と地上整備員等の個人レベルの体験の分析が中心であるが、同時にその背景にあった戦略的、あるいは戦争指導上の考慮も重視しており、その分析にかなりの枚数を割いている。その他に、南太平洋の航空戦の関係者を、将

---

67 Wilbur H. Morison, *Point of No Return: The Story of the 20th Air Force* (New York, New York: Times Books, 1979).
68 Bill Sloan, *The Ultimate Battle: Okinawa 1945 – the Last Epic Struggle of World War II* (New York, New York: Simon and Schuster, 2007).
69 Richard Overy, *Why the Allies Won* (New York, New York: W. Norton and Company, 1995).
70 Eric M. Bergerud, *Fire in the Sky: The Air War in the South Pacific* (Boulder, Colorado: Westview Press, 2000).

官から個々のパイロットに至るまで、各々どのようにその戦場を見ていたかを分析したとともに、日米それぞれの航空機の技術的な側面や兵器としての適性、南太平洋という戦域の地理学的特性等にも考察が及び、日米戦をより総合的に理解するための斬新な分析方法を用いた。なお、ベルゲルッドは南太平洋における地上戦を扱った *Touched with Fire*（1996 年）も出しており、その中でも同様の方法で南太平洋の地上戦の様々な特性と様相を分析した[71]。

情報（インテリジェンス）関係の史料は、アメリカでは 1970 年代から順次公開されているが、これらの史料を使ってアメリカの対日戦におけるインテリジェンスの役割に焦点を当てたのはエドワード・ドレアの *MacArthur's Ultra*（1992 年）である[72]。ドレアは特に 1943～44 年にかけてのニューギニア戦を取り上げ、マッカーサーの司令部による戦争指導および作戦指導における情報の役割を緻密に分析し、例えばホランジア攻略作戦（1944 年 4～5 月）が従来言われたように、マッカーサーの天才的な直観と大胆さの産物ではなく、日本側の正確な情報を把握していたことにより決定できた、冷静で計算づくの作戦であったことを実証した。その他に、太平洋戦争におけるインテリジェンスの役割を分析した研究として、日米それぞれの海軍による情報の収集、分析及び活用を取り上げたジョン・プラドスの *Combined Fleet Decoded*（1995 年）を挙げることができる[73]。

個別の兵器体系に焦点を当てた研究も何冊か出版されている。例えば、クレイ・ブレアは *Silent Victory*（1975 年）において、アメリカの潜水艦部隊に焦点を当て、戦争指導のレベルから見た対日潜水艦戦も含め、その活躍を分析した[74]。太平洋戦争で活躍した航空母艦を基幹とする機動部隊の発展と運用に焦点を当てた研究として、クラーク・レイノルズの *The Fast Carriers*（1968 年）も、個別兵器システムに焦点を絞った研究として優れている[75]。ジェームス・ベロートとウィリアム・ベロートは *Titans of the Seas*（1975 年）において、日米双方の空母部隊及び空母を中心とした海軍作戦の発展の経緯に焦点を当てた[76]。

---

71 Eric M. Bergerud, *Touched with Fire: The Land War in the South Pacific* (New York, New York: Viking Press, 1996).
72 Edward J. Drea, *MacArthur's Ultra: Codebreaking and the War Against Japan, 1942-1945* (Lawrence, Kansas: University Press of Kansas, 1992).
73 John Prados, *Combined Fleet Decoded: The Secret History of American Intelligence and the Japanese Navy in World War II* (New York, New York: Random House, 1995).
74 Clay Blair, *Silent Victory: The U.S. Submarine War Against Japan* (Philadelphia, Pennsylvania: Lippincott, 1975).
75 Clark G. Reynolds, *The Fast Carriers: the Forging of an Air Navy* (New York, New York: McGraw-Hill, 1968).
76 James H Belote and William M. Belote, *Titans of the Seas: The Development and Operations of Japanese and American Carrier Task Forces during World War II* (New York, New York: Harper and Row, 1975).

アメリカの戦時経済と動員の問題を取り上げたのはポール・コイスティネンの *Arsenal of World War II*（2004 年）である[77]。同氏はアメリカの独立戦争まで遡ってアメリカの戦時経済と動員を研究しており、軍需産業の発展等、アメリカの軍事の経済的側面の専門家であるが、同書はアメリカの戦時経済史と軍需産業史の四部作の一冊である。太平洋戦争についても、国内経済の側面に焦点を当てており、動員と軍需生産を詳細に分析した。

その他にも様々な争点別の研究が出ており、それぞれのレンズを通して、太平洋戦争におけるアメリカをより深く理解するための手助けとなる。例えば、アルバート・カウドリーは *Fighting for Life*（1994 年）において、戦場の衛生管理と野戦病院における医療技術の向上が太平洋戦争前半のアメリカの戦争指導者の重要課題の一つであり、その問題の克服がアメリカの勝利の重要な要因の一つであり、それと比して日本側は衛生と医療の問題に十分対処できなかったことが、他の要因と相まって、戦線における戦力の低下を招いたことを立証した[78]。アリソン・ギルモアは *You Can't Fight Tanks with Bayonets*（1998 年）において日本の戦闘部隊に対するアメリカの宣伝工作（主に投降勧告）を分析した[79]。いかにしてアメリカ兵の血を流さないで日本軍に勝つのかがアメリカの戦争指導者の最も重要な課題の一つであり、その手段として前線の日本兵に対する宣伝工作が重要視され、それがどのように計画及び実践されたのかが同書において詳細に説明されている。

おわりに

アメリカの対日戦争の戦争指導、作戦・戦闘、その他様々な側面が、戦後間もなくから研究されてきた。該当する研究を全て網羅することは無理であるが、本稿において、アメリカの対日戦争指導史に関する研究を中心に、その代表例と思われるものを紹介した。日米戦争の軍事史の観点からの今後の研究に資することができたら幸いである。

（防衛研究所戦史研究センター戦史研究室主任研究官）

---

77 Paul A. C. Koistinen, *Arsenal of World War II: The Political Economy of American Warfare, 1940-1945* (Lawrence, Kansas: University Press of Kansas, 2004).

78 Albert E. Cowdrey, *Fighting for Life: American Military Medicine in World War II* (New York, New York: The Free Press, 1994).

79 Allison B. Gillmore, *You Can't Fight Tanks with Bayonets: Psychological Warfare against the Japanese Army in the Southwest Pacific* (Lincoln, Nebraska: University of Nebraska Press, 1998).